

大阪市中央公会堂を活用した 「ART OSAKA 2025 映像プログラム」の実施

一般社団法人 日本現代美術振興協会

■活動内容

現代美術のアートフェア「ART OSAKA 2025」の新企画として、映像プログラムの上映会を実施した。プログラムは以下の2本柱にて構成

1. 〈うつること〉と〈見えること〉—映像表現をさぐる：60年代から現在へ

1960年代から現在までの、実験映像、ビデオアート、美術家による映像など、重要な作品の数々を一挙に上映し、日本における「映像表現」を探る充実したプログラムを実施した。

また、国内および台湾・香港から映像の専門家を招聘し、シンポジウム「うつる像／見える像—映像表現の在処」を開催した。第1部では、1960年代以降の日本における映像表現と美術の関係について考察を行い、第2部では、国際的な視点から日本の映像表現の特質とその可能性について議論を深めた。

2. 「テクノセラピー」特別上映会

1998年に開催された、国際的美術家・森村泰昌による伝説的なアートプロジェクト「テクノセラピー」のドキュメンタリー映像を特別上映した。本プロジェクトは、美術家を中心に、展覧会制作、舞台演出、会場運営などの専門家集団、さらに多くのボランティアスタッフが結集し、本会場でもある大阪市中央公会堂の全館を活用して実施されたものである。賛否両論を呼びつつも、当時の大阪の芸術文化のエネルギーを象徴する試みとして、現在においても再評価されるべき取り組みである。上映後には、トークセッション「テクノセラピーとは何だったのか？」を実施し、当時の舞台裏や関西における美術史的な意義について掘り下げる議論を行った。

■コンセプト・ねらい

現代美術のアートフェア「ART OSAKA」は、現代美術の普及と振興を目的とし、2002年にスタートした国内最長のアートフェアである。長年、ホテル高層階の客室を展示ブースに見立て開催してきたが、コロナ禍を経て、大阪市中央公会堂3階でのフロア形式に移行し、記念すべき20回目の開催で大型作品・インスタレーションに特化したフェアを新設し、拡張してきた。

今回、大阪万博を開催する年に差し当たり、公会堂を全館貸し切り、新企画として映像プログラムを実施した。

1. 〈うつること〉と〈見えること〉では、プログラム・キュレーションを梅津元氏にご担当いただき、関西を中心とした、60年代以降の映像史的に貴重な映像から現在に至る作品を上映。映像表現の多様性とその歴史的意義を広く紹介し、幅広い層への新たな発見や多様な価値観の提供をねらいとした。

また、2. 「テクノセラピー」特別上映会では、美術作家 森村泰昌氏が1998年にプロデュースした「テクノセラピー」ドキュメント映像を上映し、日本を代表するアーティストたちが当時奮闘したその革新的な取り組みを、再評価することを目的とした。

本プログラムは、日本における映像表現の歴史を振り返るとともに、その継承を図り、関西アートシーンの再評価を目的とした。また、映像史的にも重要な作品の上映を通じて、来場者に新たな鑑賞体験を提供し、その感性を刺激することで、地域文化の活性化に寄与することをねらいとした。

■活動実績

1. 〈うつること〉と〈見えること〉—映像表現をさぐる：60年代から現在へ

開催日：2025年6月6日(金)～8日(金)

会 場：大阪市中心公会堂 1 階 大集会室

<プログラム構成・出展作家> *4 プログラム 28 作品で構成。

A 「キカイデミルコトー日本のビデオアートの先駆者たち」

監督：瀧健太郎

企画・制作：ビデオアートセンター東京 2012 年 82 分

映像表現の先駆者たちへの貴重なインタビューを通じて、日本の映像表現の黎明期をたどるドキュメンタリー映画

B 映像の到来：実験映画、ビデオアート、現代美術（10 作品 112 分）

出展作家：飯村隆彦、萩原朔美、山崎博、松本正司、柏原えつとむ、野村仁、中塚裕子＋林剛＋持田明美、
奥山順市、河合政之、瀧健太郎

C 表現の探索：美術家による映像（8 作品 78 分）

出展作家：村岡三郎・河口龍夫・植松奎二（共作）、今井祝雄、福岡道雄、堀浩哉、森村泰昌、松井智恵、
白井美穂、藤本由紀夫

D 来たるべき映像表現：越境性、批評性、再帰性（9 作品 87 分）

出展作家：折笠良、鈴木了二、小松浩子、金村修、石原友明、高嶋晋一＋中川周、三宅砂織、牧野貴、葉山嶺

■シンポジウム 6 月 7 日（土）15:20-18:00

「うつる像／見える像－映像表現の在処」

第 1 部：15:20-16:30 1960 年代以降の日本における映像表現と美術の関係を探ります。

モデレーター：梅津元 氏（批評家/キュレーター）

パネラー：植松奎二 氏（彫刻家）、坂上しのぶ 氏（美術史家）、田坂博子 氏（東京都写真美術館学芸員）

第 2 部：16:40-18:00 国際的視点で日本の映像表現の特質と可能性を探ります。

モデレーター：田坂博子 氏（東京都写真美術館学芸員）

パネラー：牧野貴 氏（映像作家）、坂上しのぶ 氏（美術史家）、梅津元 氏（批評家/キュレーター）、
ユランダ・ブレア 氏（M+ キュレーター）、孫松榮 氏（台北芸術大学 教授、映像学博士）

2. 「テクノセラピー」特別上映会

会 場：大阪市中心公会堂 1 階 大集会室

○ 6 月 6 日（金）18:30- 「テクノセラピー スペシャルナイト 森村泰昌＋多田正美」上映会

○ 6 月 7 日（土）18:45- 「The Image of TechnoTherapy」

上映後 20:00-21:00：トークセッション「テクノセラピーとは何だったのか？」

登壇者：森村泰昌 氏（美術家）× 金澤韻 氏（現代美術キュレーター）

モデレーター：石田克哉 氏（MEM ディレクター）

■成果・効果

■動員数：1,439 名（3 日間のべ人数）

■上映プログラムについて

プログラム・キュレーションは梅津元氏が担当し、関西の映像史に残る充実した内容となった。4 プログラム・全 28 作品（約 6 時間）を上映し、実験映像、ビデオアート、美術家による映像など、日本の映像表現を幅広く網羅した構成となった。注目作としては、日本のビデオアートの黎明期を貴重なインタビューでたどるドキュメンタリー『キカイデミルコトー日本のビデオアートの先駆者たち』（2012 年／監督：瀧健太郎／企画・制作：ビデオアートセンター東京）を関西で初上映。

また、歴史的に重要な美術家による映像作品《映像の映像－見ること》（1973 年／村岡三郎・河口龍夫・植松奎二）、幻の名作とされる柏原えつとむ《サタウル》（1971 年）、今回初公開となった堀浩哉《READING Session No. 3》（1974 年）などを紹介。さらに、松井智恵《HEIDI 46 - brick house》（2006 年）、アニメーション作品である折笠良《みじめな奇蹟》（2023 年）、国際的活躍する牧野貴による《The Low Storm》（2009 年）など、多様な手法と視点による作品を通

じて、映像表現の豊かさを観客に提示することができた。さらにシンポジウムでは、アジアで活躍するキュレーターを迎え、国際的な視点から日本の映像表現を読み解くディスカッションを行うことができた。

「テクノセラピー特別上映会」は、1998年に本プロジェクトが開催された大阪市中心公会堂を会場とし、約30年の時を経て同じ場所で再び作品を鑑賞する機会となった。かつての舞台での上映は感慨深く、当時のアーティストたちの熱意や創作のエネルギーがあらためて感じられる上映となった。また、トークセッション「テクノセラピーとは何だったのか？」では、金澤氏の問いかけを通じて当時の森村氏の心境や背景を深く掘り下げる内容となった。1980年以降の関西の美術界の動向をふまえつつ、「20世紀最後のアーティストたち自ら作り上げた大規模なアートプロジェクト（イベント）」として、その立ち位置をあらためて見つめ直す機会となった。

本プログラムを通じて、関西を中心とした映像表現の作家たちをあらためて紹介し、その活動や作品を再評価する機会を創出した。また、ビデオアートや実験映像にこれまで触れる機会の少なかった層にもリーチし、多様な人々に映像表現の魅力を伝えることで、幅広い文化活動への認知を促すことができた。

さらに、ビデオアートの黎明期から現在に至る映像表現の流れを包括的に紹介する本試みは、関西では前例がほとんどなく、映像史的にも意義深い取り組みと言える。

■パンフレットの作成

パンフレットは全20ページにわたり、プログラム解説と作品紹介を日英バイリンガルで掲載。加えて、ドキュメントブックを制作することで、本プログラムを後世に伝えるための記録としての価値を備えたものとなった。

■認知度の向上

ART OSAKAは、毎年約1万人近い人々が来場する、国内有数の認知度を誇るアートフェアであり、2022年に新設された大型作品に特化した「Expanded セクション」も、美術関係者から毎年高い評価を得ている。本事業はそのART OSAKAと同時に開催することで、多くの来場者に加え、ふだん実験映像や映像表現に触れる機会の少ない層にも鑑賞の機会を提供することができた。

広報面においても発信力が高まり、海外メディアにも掲載されるなど、国際的な広がりを持った情報発信が実現できた。

■大阪市中央公会堂の劇場の使用

竣工当時の意匠が残る歴史的な劇場空間での上映は、現代美術としての映像作品や実験映像にとっても特別な環境であり、作家にとっては挑戦の場でもあった。また、公会堂ならではの優れた音響や投影設備によって、鑑賞者にとって没入感のある、印象深い鑑賞体験を提供することができた。

■満足度

Screening Program 〈うつること〉と〈見えること〉

満足	37.5%	やや満足	40.6%	どちらとも言えない	21.9%	やや不満	0%	不満	0%
----	-------	------	-------	-----------	-------	------	----	----	----

Screening Program 「テクノセラピー」 特別上映会

満足	44.4%	やや満足	27.8%	どちらとも言えない	22.2%	やや不満	5.6%	不満	0%
----	-------	------	-------	-----------	-------	------	------	----	----

■メディアへの記事掲載

ART ASIA PACIFIC

<https://www.artasiapacific.com/ideas/gathered-fragments-revisiting-japans-moving-image-history/>

GEN DE ART

[https://www.tfwsa.or.jp/post/art-osaka-](https://www.tfwsa.or.jp/post/art-osaka-2025%E3%81%A8%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E6%98%A0%E5%83%8F%E8%A1%A8%E7%8F%BE%E3%81%AE%E5%8A%9B?lang=ja)

[2025%E3%81%A8%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E6%98%A0%E5%83%8F%E8%A1%A8%E7%8F%BE%E3%81%AE%E5%8A%9B?lang=ja](https://www.tfwsa.or.jp/post/art-osaka-2025%E3%81%A8%E7%8F%BE%E4%BB%A3%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E6%98%A0%E5%83%8F%E8%A1%A8%E7%8F%BE%E3%81%AE%E5%8A%9B?lang=ja)

日経新聞オンライン

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQ0IH04A8H0U5A600C2000000/>

Time Out Art Osaka 2025 - where past grandeur meets cutting-edge contemporary art

OCULA <https://ocula.com/art-fairs/art-osaka/>

ARTouch News <https://artouch.com/art-news/content-179474.html>

Mr. Song-Yong SING 寄稿 <https://artouch.com/artouch-column/%E5%BD%B1%E5%BD%A2%E5%8A%9B%E5%B0%88%E6%AC%84/content-182452.html>

Hankyung Arte (the arts-focused channel run by The Korea Economic Daily)

<https://www.arte.co.kr/art/theme/8869>

■来場者の声

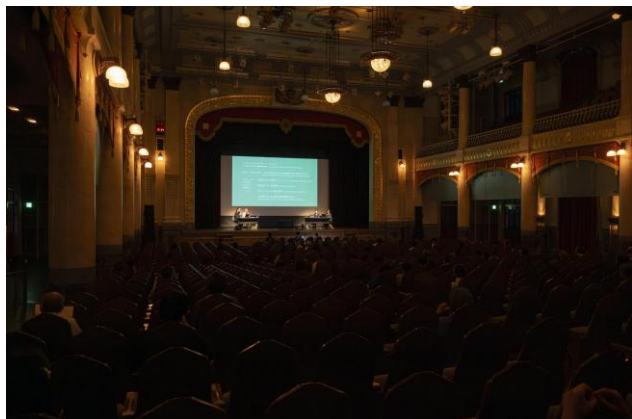
1. テクノロジーの映像を二十数年を経て同じ会場で見るというのは大変感慨深く、上映後のトークも興味深かった。
シンポジウムに関しては、あのような美術に関する国際的なシンポジウムが大阪で開催されることは稀なので、貴重な機会だと思った。
2. 映像プログラムが充実しており、二日間では全て観て回れず、三日間かけて回りました。
3. アートフェアとしては画期的な歴史的・教育的に意味のある内容だった。

■今後の展開

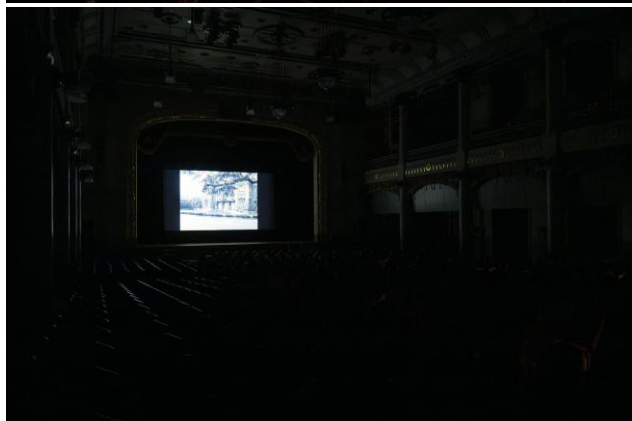
- ・継続した開催を目指し、出展アーティストのリサーチや資金獲得について模索する。
- ・関西を中心とした日本の映像表現の認知度・評価の向上に繋げるためには、国際的に活躍するキュレーターや批評家の力が不可欠なので、関係性の構築を進めていく。
- ・多様な観客層へのアプローチを強化するため、文化施設や他のアートイベントとの連携を図り、映像表現に親しむ機会を広げる。



シンポジウムの様子



テクノセラピー上映会・トークセッションの様子



撮影：仲川あい